

育とうとする力のために

岡野正美

OKANO Masami

しまね自然の学校/代表



1—とある日のスナップ

Tと言う中学2年の少年がいる。彼は小学校4～5年の大半を、いわゆる不登校児として過ごした。彼が5年生の終わりごろだったか、島根半島の岩場にクライミングへ連れ出したことがある。ひとしきり遊んだ後のランチタイムに、「ご飯を炊いて!」と一握りの米と空き缶とライターを渡した。彼は海水で米を洗い真水で濯ぎ、石組みの炉を手際よく作り、30分後に「出来たよ!」と嬉しそうに持って来た。

炊き立てのご飯を二人で食べながら、「空き缶でご飯を炊いたことがあるのか?」と聞いてみた。ちなみに、しまね自然の学校では、キャンプ時の調理器具に登山用のストーブを使用しているため、焚き火で、しかも空き缶でご飯を炊いた経験などない筈なのだ。予想通り彼の答えは「初めて!」だった。「良く出来たね」と続けた私

に、彼は「『スタッフ(自然の学校の)ならどうするだろう』って考えたら、なんか出来るような気がした」とニコニコと嬉しそうだった。

他愛のないスナップではある。ただ、ここには「子どもの育ちとは」と言う、現代の我々の社会にもっとも重要で難解な課題の答えが全て揃っている。子どもの“育ち”が、本人やその帰属する社会にどういふ結果をもたらし、そのプロセスや状況はどのようにあるのか、と言うことである。

Tはこの体験の翌日から学校に戻った。2年近くも続いていた不登校を、この日を境に止めたのだ。

2—言葉では無くて

子ども達の“育ち”とは、彼らの誰でもが持つ「育とうとする力」の発揮された結果と考えるべきである。もし、

子ども達の誰かが社会的に好ましくない状況にあったり、年齢相応の育ち方が出来ていない状況などにいるのだとしたら、それはその子ども達の内的なものに問題があるのではない。前者は、その子どもの「育とうとする力」が、歪んだ外的要因に刺激された結果だと考えるべきだし、後者は、その育ちを取り巻く環境に「育とうとする力」を発揮させない歪んだ力があるのだと、考えるべきなのである。さらに、そうした状況下にある子ども達は、殆どの場合、いわゆる言葉でのやりとりを信じない。彼らは、理解にしても表現にしても、身体言語とでも訳せば良いかも知れないのだが、ノンバーバル(言葉に頼らない)な表現を全てに優先する。だけに、その支援環境には「量的に何かかもが揃う」ことよりも、子ども達の誰もが感じる事が可能な「質的に豊かな環境」であることが何よりも大切なのである。

3—島根の体験教育環境としての豊かさ

過疎化が激しく、高齢化・超少子化が進み、行政的観点からみれば、島根にはまるで「問題以外は何も無い」かのようだ。しかし、島根は穏やかにして優しい自然が豊かである。そしてそれは、子どもの“育ち”の支援環境としてもっとも大切なことでもある。これまでに、しまね自然の学校が展開してきたプログラム・メニューは、およそ50を数える。島根は体験教育の環境と捉えてみると、実に豊かで大きな可能性に溢れている。主だったものをいくつか挙げてみる。

●「ウサギの子って誰さ!」

出雲市大社町の鷺浦地区をフィールドにしたプログラム。フィールドは、ノルウェーやフィンランドのフィヨルドをスケールダウンしてイメージしてもらうのが一番分かりやすいかと思う。幅が60～80m、奥行き300mほどの湾の奥にテントが30ぐらい張れる砂利の小さな浜があり、プ



■写真2—浜辺でのキャンプ

ログラムに必要な物資・機材は船を使って搬入する。子ども達はそれぞれのペースで、浜の背後の山を2～4時間ぐらいかけて歩いて入って来る。原生の樺の森を歩いて、クライミングロープがフィックスされた岩場を越える。小さな沢沿いの踏み跡を杉の巨木の林に抜け、「深袋」のエメラルド・グリーンに輝く美しい海に出会った瞬間、子ども達の喜びと感動に満ちた瞳の、いかに生き生きと美しいことか。

●「雪洞に泊まる」

このプログラムは、冬の野外ならではの楽しさや素晴らしさを、子ども達に体験させるに最高のプログラムであるかも知れない。風雪の中と言う、ある種「極限的な環境」でのファシリテーションの難しさはあるが、内容的には単純である。広島との県境に近い高原の森の中に、10人程度が就寝できる巨大なまくらを作って泊まるだけである。しかし、このプログラムは島根らしいと言いたいのではないかと疑問に思われるかもしれない。ところが、雪の質や自然環境、また社会的な状況などを複合的に検証してみると、実は、体験教育事業として実践出来るレベルの環境が全国的にみても意外に少ないことが分かる。



■写真1—深袋の少年達



■写真3—食事の支度



■写真4—洞窟の中で

●「おろちの子らの川流れ」

陽光も風も、目にするもの全てが美しく耀いて、初夏は鳥根がもっとも美しい。このプログラムは、そうした季節に、悠久の時を滔々と流れてきた故郷の大河を全身で感じて遊んでしまおう、と言うものだ。斐伊川はヤマタノオロチの伝説や伝承から、この国で一番知られた河であるのかも知れない。その川を、全国的にも珍しい「砂河川」と言う特性を逆手にとって、出雲・簸川平野全域を浮き輪だけで流れ下るのである。砂に埋め尽くされ、伏流する流れも浅いこの川は、子ども達に言わせれば「流れるプール」そのものだそうである。



■写真5—おろちの子らの川流れ

■写真6—自然の「流れるプール」

4—子ども達の育ちの理想的な環境

体験教育活動を通じた子ども達との関わりから「この国は拝金主義の権化を目指すのか」と思えるほど、現在の都市型社会の精神性の貧しさが見えてくる。そうした状況に翻弄される現代の子ども達の育ちを考える時、その支援にはまだまだ不十分なものを感じていた。今、子ども達の育ちにもっとも必要なものは、子ども達一人一人への対処療法的な対応などでは決して無く、母性や家族、隣人や暮らしている場所といった社会との関係を取り戻すための機会なのではないかと考えている。

5—全ては「ともに食べる」ことから

そんな意識の下、この持続可能な社会について子ども達に体験的に伝えられる手段は何か、と考えた先に出てきたキーワードが「ともに食べる」ことだった。

かつて、人々は「ともに食べる」ことで家族を育んだ。地域もまた「ともに食べ直らう」ことで、地域として営まれてきた。それが、今はどうだ。マルチカルチャー(多種の文化)と言う言葉が伝えるように、パーソナリティーがパラレルに認められる社会が選択されたのだと言えば聞こえが良い。しかし、現実はどうだろう。「ともに食べる」ことの意義が見失われた先に、家族は壊れる。地域社会の最小単位である家族が壊れれば、些細な権益の下での自己主張に、地域の一員としての社会力をも失い続ける。こうした環境に、子ども達はその育ちにもっとも大切な「母性」を見失い、さらに「ルーツレス」に成らざるを得ない。そうした子ども達が関わるトラブルは、近年、そ

の枚挙にいとまがない。

こうした認識から、この「ともに食べる」ことを、質の高いプログラムとして展開することを意識して、しまね自然の学校は、3年前に出雲市上島町の田園豊かな環境に移転した。ここで、具体的に展開してきたプログラムは、田園環境ならではの豊かさを意識してデザインし直した「焚き火小屋」と「かまど」で、「火」と「ともに食べる」を体験することである。また、しまね自然の学校は主催事業以外にも同じコンセプトの下で、子ども達だけではなくその保護者の世代をも対象に、他団体との共催や行政からの委嘱事業を展開して来ている。

嬉しいことに「風来舎」と名付けた焚き火小屋が完成する2年ほど前、地元がこのコンセプトを理解し協同してくれる子育て世代の女性達の団体が生まれた。「田園に豊かに暮らす」を考える女性の会(通称ペロニカの会)である。

6—母性と社会の底辺を支える女性たち

民俗学者の高群逸枝や宮本常一の著したものに運良く触れる機会を持ち、論として、子育て世代の女性達がこの国の文化やその底辺に、どれほど大きく関わってきたのかを、それなりに理解していたつもりだった。しかし、その認識は甘かったようである。ペロニカの会のメンバーの家族の中でのあり様や、新しいムーブメントの実践者である女性たちが地域に展開する凄い力を、あまりにも過小評価していたと反省せざるを得ない。テーマを持って群れ集った彼女達の実践は、地域の力として即効する。しまね自然の学校は、2007年の9月で10年目を迎え、ブランドと言っても過言ではない社会的評価をいただいている。しかし、そんな我々でも難しい地域社会に直接関わる事業を、彼女達はこともなげにやっけてのける。現在、彼女達が主催事業として活動の中心に位置付ける



■写真7—焚き火小屋で「ぐるぐるパンを焼こう!」



■写真8—ペロニカの会

「かまどご飯を食べてみよう!」など、地元の幼稚園や小学校に関わる事業がそれだ。

男たちは、新たにことを起こすにあたって、まず始めに「金が無い!」「人が居ない!」と、「できない理由」を探すことから始めるようだ。それだけに提言者は、そのできない理由を覆すことに消耗しきって、時に可能性や意義ある企画も潰される。しかし、ペロニカの会の子育て世代の女性達は全く違う。子ども達の育ちに関わることなど、自身の帰属する社会に利益があることなら、宮本

常一がその女性史に詳しく伝えるように、組板と包丁を持って寄り集い、出来ることからバタバタと全く気負うこと無く、この国の底辺を支えてしまうのである。しかもそこには、独りよがり中途半端な理論など何処にも無い。事実在即し、あくまで等身大のスタンスに立って、子ども達とともに実に楽しそうに動いていくのである。つまりは、ここにこそ、その母性のノンバーバルなモノに、子ども達が自らのルーツを学ぶ機会があるのである。

7—いま我々がしなければならないこと

鳥根は、ある意味この国の最先端にあるだろう。そうした鳥根のような環境だからこそ、運良く残されたこの社会力ある女性達の存在を確かなものと認識して、その力を社会に取り戻すことに、いま我々は真摯にあるべきだ。持続可能な未来のために、次代を担う子ども達の健全で豊かな育ちの環境の再構築のためにも、かつてこの国を育み、その底辺を支え、持続可能な社会足らした女性達の力こそを、次代のニーズに沿わせデザインし直し、大きく大切なものとして活かすことを「いま我々がしなければならないこと」と、考えるべきである。